

研究委員会企画シンポジウム 3

心理学に基づく学習援助の実践

企画者・司会者	岡 直 樹 (広島大学大学院教育学研究科)
話題提供者	植 阪 友 理 (東京大学大学院教育学研究科)
	橋 本 創 一 (東京学芸大学)
	瀬 尾 美 紀 子 (相模女子大学)
	青 木 久 恵 (福岡東医療センター附属看護学校)
指定討論者	市 川 伸 一 (東京大学大学院教育学研究科)
	神 原 一 之 (広島大学附属東雲中学校)

企画の趣旨

岡 直樹

学校教育における今日的課題の中でも、学力低下や学習意欲の問題など学習に関わる問題の解決を図るためには、たとえば、当面のつまずきの内容に対して対処するばかりでなく、考え方や学習の仕方の改善を図る必要がある。このような学習面への心理教育的援助サービスは、学習援助と呼ばれており、心理教育的援助サービスの中核をなすものとされている。この学習援助は、学力の底上げにつながるものである。しかしながら、教授・学習に関する研究は数が多いものの、学習援助の実践研究は少ないのが現状である。

本シンポジウムでは、学習援助の実践を紹介し、指導の場のつくり方や運営の仕方なども含め、今後の課題や方向性について議論する。そのため、個別の学習援助として、植阪氏には認知カウンセリングによる学習援助、橋本氏には発達障害児に対する学習援助の事例について話題提供をお願いした。また、学校における学習援助においては、個別ばかりでなく小グループを対象とする学習援助も欠かすことができない。そこで、小グループを対象とする学習援助として、瀬尾氏には学習法の改善を目指す取り組み、青木氏には学業不振への援助の取り組みの話題提供をお願いした。そして、指定討論者の市川氏には大所高所からのコメントを、神原氏には中学校教員の立場からのコメントをお願いした。

認知カウンセリングを通じた学習援助

植阪 友理

本発表では、認知カウンセリングについて紹介し、学習支援において心理学がどのように生かされているのかについて具体例を交えながら論じた。

認知カウンセリングとは、「～がわからなくて困って

いる」という認知的な問題を抱えた学習者に対して、認知心理学的知見に基づいて個別的に支援を行い、学習者の自立を促す活動である(市川(1993)が提案)。認知的な問題とは、記憶、理解、問題解決、学習意欲などに関する問題である。来談した学習者に対して、①診断の実施、②指導方針の立案、③実際に指導、④事例検討会で報告、という流れで認知カウンセリングを実施している。本発表では具体例を交えながら、各段階の特徴と心理学との接点を論じた。

認知カウンセリングの第1の特徴は、診断を行う際の観点にある。診断とは学習者のつまずきを明らかにする段階である。丁寧なやり取りを通じて、学習者の知識や学習方法などの問題を明らかにすることを目指している。また「答えさえ合えばよい」や「とにかく丸暗記する」などの学習観をもっていると、学習方略を獲得しにくいことも指摘されており、学習者の持つ学習観も含めて多面的に診断を行っている。効果的な診断のためには、誤概念研究や学習方略研究、問題解決研究などに関する知識が有効となる。

具体的な指導方法も、通常の個別学習とは異なっている。学習者の自立を目指しているために、指導した内容や、学習上の問題を学習者自身が意識化できるように配慮を行っている。たとえば、教訓帰納と呼ばれる技法を使って、指導後になぜ間違えたのか、なぜ解けたのかについて言語化することを促している。さらにこうした技法をカウンセラーが用いるのみならず、学習者が自らの学習においても自発的に利用することを促している。こうした活動は学習者のメタ認知の育成につながると考えられる。

指導を行うのみならず、終了後にはケースレポートを作成して他者と検討を行う点にも特徴がある。認知カウンセリングは大学関係者を中心に実践されてきたが、ケース検討会には学校現場の教師も参加している。また教師自身が認知カウンセリングとケース検討会を行うことによって、授業改善を行った学校もあり、学校教育へも有益な示唆を与える活動といえる。誰もがいつからでもできる活動であり、広く実施されるようになることを期待している。